

# Chapter 1

## 基本的要請と準備

本章では、これから議論する場の量子論の準備を行う。場の量子論は、既存の量子力学などの物理法則あるいは方程式を **Poincaré 変換** に対して不変な形に書き直す理論である。ただし、Poincaré 変換は、Lorentz 変換と時空並進変換のことである。

### 1.1 記法

まず、微小な時空間上の2点、 $(ct, x, y, z)$ ,  $(ct + dt, x + dx, y + dy, z + dz)$  に対して、世界長さ  $ds^2$  を考える。

$$ds^2 := c^2 dt^2 - (dx^2 + dy^2 + dz^2) \quad (1.1.1)$$

4次元時空座標を、

$$x^\mu := (ct, x, y, z) \quad (1.1.2)$$

$$x_\nu := (ct, -x, -y, -z) \quad (1.1.3)$$

と定義する。Einstein の縮約を使っていることに注意する。計量テンソル  $\eta_{\mu\nu}$ ,  $\eta^{\mu\nu}$  を、

$$x_\nu = \eta_{\mu\nu} x^\mu \quad (1.1.4)$$

$$x^\nu = x_\mu \eta^{\mu\nu} \quad (1.1.5)$$

となるように定義する。計量テンソルを用いれば、

$$ds^2 = \eta_{\mu\nu} dx^\mu dx^\nu \quad (1.1.6)$$

$$= dx_\mu dx_\nu \eta^{\mu\nu} \quad (1.1.7)$$

と書ける。 $\eta_{\mu\nu}$  は、上付き添え字が  $k$  個、下付き添え字が  $l$  個あるものに対して、添え字を上付き添え字を  $k+l-2$  個、下付き添え字を  $k+l+2$  個にするものだと考えてよい。なお、負の添え字の数は、添え字の上下を逆転させたものとする。同様に、 $\eta^{\mu\nu}$  は、上付き添え字が  $k$  個、下付き添え字が  $l$  個あるものに対して、添え字を上付き添え字を  $k+l+2$  個、下付き添え字を  $k+l-2$  個にするものだと考えてよい。

### 1.2 Poincaré 変換

Poincaré 変換は、Lorentz 変換のパラメータを  $\Lambda_\nu^\mu$ 、時空並進のパラメータを  $a^\mu$  とすると、

$$x'^\mu = \Lambda_\nu^\mu x^\nu + a^\mu \quad (1.2.1)$$

と書ける。微小変位は、

$$dx'^\mu = d(\Lambda_\nu^\mu x^\nu + a^\mu) \quad (1.2.2)$$

$$= \Lambda_\nu^\mu dx^\nu \quad (1.2.3)$$

と書けるから、世界長さ  $ds^2$  は、

$$ds'^2 = \eta_{\rho\lambda} dx'^{\rho} dx'^{\lambda} \quad (1.2.4)$$

$$= \eta_{\rho\lambda} (\Lambda_{\nu}^{\rho} dx^{\nu}) (\Lambda_{\mu}^{\lambda} dx^{\mu}) \quad (1.2.5)$$

$$= \eta_{\rho\lambda} \Lambda_{\nu}^{\rho} \Lambda_{\mu}^{\lambda} dx^{\nu} dx^{\mu} \quad (1.2.6)$$

となる。今、Poincaré 変換に対して方程式是不変であることが要請されているのであった。式 (1.1.6) で与えられる世界長さを与える方程式も Poincaré 変換に対して不変であるべきだから、

$$ds'^2 = ds^2 \quad (1.2.7)$$

$$\Leftrightarrow \eta_{\rho\lambda} \Lambda_{\nu}^{\rho} \Lambda_{\mu}^{\lambda} dx^{\nu} dx^{\mu} = \eta_{\mu\nu} dx^{\mu} dx^{\nu} \quad (1.2.8)$$

$$\Leftrightarrow \eta_{\rho\lambda} \Lambda_{\nu}^{\rho} \Lambda_{\mu}^{\lambda} = \eta_{\mu\nu} \quad (1.2.9)$$

$$\Leftrightarrow \eta_{\rho\lambda} = \eta_{\mu\nu} (\Lambda^{-1})_{\rho}^{\nu} (\Lambda^{-1})_{\lambda}^{\mu} \quad (1.2.10)$$

である。ただし、

$$\Lambda_{\nu}^{\rho} (\Lambda^{-1})_{\rho}^{\nu} = (\Lambda^{-1})_{\rho}^{\nu} \Lambda_{\nu}^{\rho} = 1 \quad (1.2.11)$$

なる関係を用いた。

### 1.3 スカラー・ベクトル・テンソル

本節ではスカラー・ベクトル・テンソルを定義する。Lorentz 変換のパラメータを  $\Lambda$  とする。

#### 1.3.1 スカラー

スカラーは Lorentz 変換に対して不変な量である。すなわち、

$$S \mapsto S =: S' \quad (1.3.1)$$

なる量である。

#### 1.3.2 ベクトル

ベクトルは 2 種類あり、Lorentz 変換によって時空座標を変換したときに、時空座標  $x^{\mu}$  と同じように変換される反変ベクトルと、 $x_{\mu}$  と同じように変換される共変ベクトルに分けられる。すなわち、

$$A^{\mu} \mapsto \Lambda_{\nu}^{\mu} A^{\nu} =: A'^{\mu} \quad (1.3.2)$$

$$B_{\mu} \mapsto B_{\nu} (\Lambda^{-1})_{\mu}^{\nu} =: B'_{\mu} \quad (1.3.3)$$

において、 $A^{\mu}$ 、 $A'^{\mu}$  が反変ベクトル、 $B_{\mu}$ 、 $B'_{\mu}$  が共変ベクトルである。

#### 1.3.3 テンソル

テンソルは 3 種類あり、Lorentz 変換によって時空座標を変換したときに、時空座標  $x^{\mu}$  を 2 回変換したとき同じように変換される 2 階の反変テンソル、時空座標  $x^{\mu}$  を 1 回変換してから 1 回逆変換したとき同じように変換される 2 階の混合テンソル、時空座標  $x_{\mu}$  を 2 回変換したとき同じように変換される 2 階の共変テンソルの 3 つに分けられる。すなわち、

$$T^{\mu\nu} \mapsto \Lambda_{\rho}^{\mu} \Lambda_{\lambda}^{\nu} T^{\rho\lambda} =: T'^{\mu\nu} \quad (1.3.4)$$

$$T_{\nu}^{\mu} \mapsto \Lambda_{\rho}^{\mu} T_{\lambda}^{\rho} (\Lambda^{-1})_{\nu}^{\lambda} =: T'_{\nu}{}^{\mu} \quad (1.3.5)$$

$$T_{\nu\mu} \mapsto T_{\lambda}^{\rho} (\Lambda^{-1})_{\mu}^{\rho} (\Lambda^{-1})_{\nu}^{\lambda} =: T'_{\nu\mu} \quad (1.3.6)$$

の 3 つがある。3 つのテンソルの間には、

$$T^{\mu\nu} = T_{\lambda}^{\mu} \eta^{\nu\lambda} = T_{\rho\lambda} \eta^{\mu\rho} \eta^{\nu\lambda} \quad (1.3.7)$$

なる関係がある。

## Chapter 2

# Klein-Gordon 方程式

### 2.1 Klein-Gordon 方程式の「導出」

以下では断りの無い限り,  $c = \hbar = 1$  なる自然単位系を用いる. 非相対論的・古典的エネルギーの関係式,

$$E = \frac{\mathbf{p}^2}{2m} \quad (2.1.1)$$

の両辺に波動関数  $\psi(t, \mathbf{x})$  掛けて

$$E \rightarrow i \frac{\partial}{\partial t} \quad (2.1.2)$$

$$\mathbf{p} \rightarrow -i \nabla \quad (2.1.3)$$

なる変換を行えば,

$$i \frac{\partial \psi}{\partial t} = -\frac{1}{2m} \nabla^2 \psi \quad (2.1.4)$$

となり, Schrödinger 方程式を得る.

では相対論的なエネルギーの関係式,

$$E^2 = \mathbf{p}^2 + m^2 \quad (2.1.5)$$

を変換すると, どのようになるだろう. 自然単位系を用いているため, 静止エネルギーの 2 乗について  $m^2 c^4 = m^2$  となっていることに注意する. 式 (??) の両辺に波動関数  $\psi(t, \mathbf{x})$  掛けて, 式 (??), 式 (??) を用いれば,

$$\left( i \frac{\partial}{\partial t} \right)^2 \psi = \left[ (-i \nabla)^2 + m^2 \right] \psi \quad (2.1.6)$$

$$-\frac{\partial^2 \psi}{\partial t^2} = -\nabla^2 \psi + m^2 \psi \quad (2.1.7)$$

$$(\partial_\mu \partial^\mu - m^2) \psi(t, \mathbf{x}) = 0 \quad (2.1.8)$$

が成立する.